

「モノ」を通して、それを作り出した人びとの暮らしを見つめ直す

第18回企画テーマ展

「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」開催

大 坂 拓

アイヌ民族文化研究センター 学芸主査

10月16日から、第18回企画テーマ展「アイヌのくらしー時代・地域・さまざまな姿」がオープンします。この展示は、公益財団法人アイヌ民族文化財団が毎年実施してきた「アイヌ工芸品展」事業によるもので、当館での開催は平成23年度の「千島・樺太・北海道アイヌのくらし」以来、10年ぶりとなります。

今回の展示では、資料選定の段階から、地域や時代、可能であれば作り使っていた人びとがハッキリしている「モ

ノ」を集めることを心がけました。これまで、アイヌ民族の作り出した民具は、残念ながらバックデータがハッキリしないものが多いと言われてきました。しかし、作り手や使い手が分からない資料だけを並べてしまうと、その感想は端的に言って、「ああ、奇麗だなあ」、「こんな道具があったんだなあ」と

いった漠然としたものに終わってしまいがちです。

バックデータがある資料を起点として、それらがどのような時代の中で、どういった人物により作り使われ、いかなる経緯で博物館に保管され、遺族は今その資料についてどう思っているのかを伝える。今回の展示のテーマはここにあります。多くの方々にご来場いただき、アイヌ民族の過去から現在へのあゆみに思いを馳せて頂ければ幸いです。

写真1

沙流地方の口承文芸伝承者として著名な平目カレピアさん（1934年撮影）。写真2の着物を着用している。当時の機材では屋内での撮影が難しかったため、屋外に道具を持ち出す演出が加わっているものと見られる。

写真2

カレピアさんが着用していた着物。写真1が撮影された翌年には手放されていたようで、現在は北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館に所蔵されている。



写真1



写真2